

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症 例 概 要 利用者氏名: 80歳代 女性 要介護5

病 名: 頰椎症性脊髄症・下顎部骨髓炎術後・廃用症候群

利用サービス: 入所

経 過: R1年に当施設回復期より自宅退所

上記疾患にてADL低下し、前医より自宅退院困難との事で、
当施設へリハビリ目的にて入所となる

内 容

回復期退院後もお嫁さんが一人で全介助の自宅介護を行っていた。

上記疾患にて前医ご入院されるが、更なるADLもほぼ自立低下や歯科の介入・全身状態の管理が必要となり今後の転帰先も含めて老健入所の運びとなる。

入所直後は在宅との違いに困惑され、元々のご性格もあり夜間不眠・介護依存・要望過多・NC連打など対応が苦渋する状態であった。

ご本人も精神不安が募り、ご家族へ連絡を繰り返すなどの行動が見られた。

まずは環境順応して頂く事・スタッフとの関係性構築に努め、ご本人がお好きなお花を観賞する時間を一緒に共有・リハビリ意欲は高くみられた為、個別性のある自主リハビリの導入また実施時にはポジティブな声掛けを繰り返した。

複合型施設としての強みを活かし、在宅時に介入していた訪問リハビリチームからの情報提供や、回復期入院時に介入していたセラピスト達には、接触時等に愛護的な関わりを提供し、余暇時間の充実・個別性のあるリハビリやケアの提供を行い、ご家族への悲壮感ある連絡は消失し、お嫁さんからも安心・称賛のお言葉を頂く事が出来た。

スタッフとの関係性が構築された後には、同席のご利用者さんと談笑される姿もみられ施設環境に順応されていかれた。

在宅で個別性の強いケアを提供されている中で、施設生活に順応する事はご本人にとってお辛い経験ではあったが、信頼関係を構築していく中で「リハビリ」が合い言葉となり自主リハビリも促進された事で、介助量の軽減および身体可動域の向上、それらに伴う達成感・自己肯定感の向上により日常を笑顔でお過ごしされる時間が出現・増加する事が出来た。